

2020年6月21日 瑞穂キリスト教会 主日礼拝

メッセージ題「苦難のただ中で生きる」 牧師：秋山義也

聖書：テサロニケの信徒への手紙一第2章17節～3章13節

・「再会」の言葉 (2:17)

今日は父の日です。父の思いとはどういうことなのかを皆さんと共有し、偲びたい方が今1人います。つい先日、天に召された横田滋さんです。お連れ合いのさきえさんは、クリスチャンであり、滋さんの葬儀は教会で挙げられたということですが、恵さんが北朝鮮に拉致されてから、恵さん始め拉致被害者救済、帰還を訴えてこられました。家族に、子どもに突然、会えなくなる。理不尽な苦しみを前に、最期まで「恵ちゃんに会いたいなあ」と言われたと、訃報の際のニュースで伝えられたのが印象的でした。恨みや憎しみの言葉ではなく、再会の希望の言葉に生きたのでした。だからこそ、その言葉は、私たちの心に残り続けるのです。「子どもに会いたい」「会えないのがつらい」…家族とは何か、父・母とは何か、子とは何か、いろんところで痛みのニュース、家族間における事件の出来事が起きていますが、私たちは今日、「父なる神」と私たちが祈ることができる、その方の思いから始まる、出会いと再会の恵みについて、思い巡らしてみたいのです。

テサロニケの信徒への手紙一、第2章17節は、私たちが出会えない中であって、大きな慰めを与えてくれる言葉です。テサロニケにて、伝道し、礼拝をし、そのところで教会が、キリスト者が大きな迫害にあったことを語ってきました。この手紙を書いた使徒パウロも、その渦中にいました。そして迫害から逃れた先でも伝道した、コリントの町において、このテサロニケの手紙を書いたとされています。彼は、心の底からテサロニケの人々に会いたかったのです。一緒にキリストの福音を喜んで与った神の同労者たち、いい時だけでなく、悪い時、迫害の時、苦難と困窮の時も共に痛みを分かち合った神の家族とも呼べるような、その1人ひとりを心から思っていました。違う町に行っても、会えない期間も、神に一人ひとりを覚えて祈っていたのでしょう。17節は祈りから出ている言葉です。それは会えないということを語りつつ、しかし、心が離れていないと語るのです。会えなくても、心は一緒だと。これがキリスト者における信仰の交わり、出会いの醍醐味ではないでしょうか。会っていないと友ではない、ではなく、会っていないと、主イエスによって、私たちは心から結ばれている。「隣人を自分のように愛しなさい」という主イエスの言葉から、あなたを思っている。神に、あなたの心、魂のことがらを、救いと励ましのために祈っている。そのようにないのちの出会いが明らかになる時、それが、また出会えない時の幸い、感謝でもあったのです。今、私たちもこの福音の言葉の中で、生かされ、他者に励ましの思いを伝えたい。心では離れていません！と。語り、伝えたいのです。

でもやっぱり会いたいよね。と、パウロは続けます。顔を見て、安心したい。これまでのことを語りたい。私たちも今、痛いほどこのことを思い知らされています。3章11節から13節は「祝福の祈り」ですが、ここでもパウロは、「神と主イエスが、わたしたちにそちらへ行く道を開いてくださいますように。」と祈り願っています。心では離れていないから、もう会わなくていい、ではなく、心では離れていないから大丈夫。でも、それは会いたいという思いがなくなることとイコールではないのです。

このように強く、再会を願ったパウロでしたが、「サタンの妨げ」(2:18)があった。つまり、人の思いもよらないところからくる試みによって、それが適わなかったということです。しかし、落胆しません。テサロニケの人々に、心からの希望と喜び、あなた方自身が誉れであり、誇るべき冠

だと、語るのです。会えなくても、心がつながっているということは、このような友情、愛情の言葉を私たちにイキイキと備えられていくということなのです。私たちも、今、このような言葉に生かされていきたいのです。

・「苦難」を語るキリスト教

テサロニケの信徒への手紙一を6月から続けて、学んできています。どんなことにも続けているから、見えてくる事柄があります。自分の好きな聖句を抜き出して、語る場合には起きにくい出来事です。それは、「苦しみについて」ここまでやるか、と思えるほど、パウロからテサロニケの教会の人々に言及していることです。

「そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。」(1:6~7)、「わたしたちは以前、フィリピで苦しめられ、辱められたけれども、わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語ったのでした。」(2:2)、「兄弟たち、あなたがたは、ユダヤの、キリスト・イエスに結ばれている神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちから苦しめられたように、あなたがたもまた同胞から苦しめられたからです。」(2:14)そして、今日第2章17節から3章の13節に至る間においても、「サタンの妨げ」(18)という言葉から、「苦難」という言葉が、3回も出てくるのです。(3,4,7)

これらは、苦難の事柄を、そのまま放置している言葉ではありません。苦難があった、と確かに語りながら、またこれから起こる苦難があるということをしつかりと見据えながら、そこからどう共に生きるのか。「動揺」(3:3)が起きる。これはつまり一度強く決心したことが揺り動かされる事態を意味しているのですが、誰一人として、そうしたこと、イエスを救い主と信じたことから離れないで欲しいという、使徒パウロの願い、親、兄妹のような思いからきているのです。そうして、その苦しみの中で、自分にできることを必死に見出し、共に伝道してきた、テモテをそちらに送ることで、関わりを保つのです。自分がそこにいない、いけないけれど、でも自分もそこにいるという思いを、テモテにバトンとして渡したのです。そしてそこには、主イエスによる出会い。主イエスによる再会。主イエスが間に共にいて、キリストの愛が分かち合われるという祈り願いもあったでしょう。

苦難を語ること。共に通ったからこそ、語るができるものでもありますが、でもあまりにも「苦難」を続けて語られると、つらい、と思う人もいたのではないのでしょうか。語れる幸いがあります。でも「苦難」「苦しみ」という言葉を聴いて、言葉を失う人がいる。語るができない。これまでの苦しみを思いつつ、立ち止まる人がいるのではないか。そう思う時に、そこに信仰とは何かと揺さぶられていいのではないか。苦しみの中で、「神は一体何をしているのか」「神はどこにいるのか」と問いかけて、いいのではないか、と私は思うのです。

いくつかの神学書を読む中で、現代の教会、キリスト教が、あまりにも苦しみのことを語ることに對して、疑問を呈している文章に出会いました。「キリストの十字架の苦しみ」を通して、「死」や「いのち」の出来事、悲しみや痛みが出来事を、私たちはなぜこれほどまでに語り、また聖書から聴かなくてはいけないのか。また苦しみと共に「罪」や「罪人」という迫りが、聖書から、礼拝で聴かれるメッセージからありますから、「暗いキリスト教」のイメージを教会が作っているの

はないか。世の中から見ても、あまりにもそうしたことを強調されると、教会には足が向かないのではないか。もっと明るい面や、キリスト信仰の良い面、楽しみの面を強調してよいのではないか、そうした方が教会に人がもっと来てくれるのではないか、という指摘です。

しかし、そうした指摘を思えば思うほどに、苦しみとは何かが、自分に迫ってくるのです。果たして、この世に苦しんでいない人などいるのだろうか？苦しみを感ぜないようにする手段はあります。現実逃避、違う楽しいことを考えてみる。考えないようにすることがあります。ある人と自分を比べて、あの人ほどは苦しくない、と開き直る、などです。しかし、他者の苦しみにも自分の苦しみにも向き合えないことで、私たちは本当に、イエス・キリストが十字架で死を迎える程に苦しまれた、その苦しんだからこそ生まれる「愛」に生きることができるのだろうか？他者を自分のように大切にするとということが、出来るのだろうか？という問いが生れてくるのです。

私にとって、苦しみの意味を問われた最大の経験の1つは、これまで説教で何度も語ってきましたが、私たちの長男が生まれた際に、父親として体験した苦しみでした。694グラムで産まれて来たいのち。生きるか死ぬか、という苦しみを通って闘う小さな体を前に、自分の無力さを痛感し、なぜですか？神様と、祈ったあの体験でした。そして、またその出来事を受けて、励ましという名前の、苦しみが待っているのです。「秋山牧師のところに喜々君が小さく産まれてきたのは、秋山牧師が立派な（人の苦しみの分かる）牧師になるための試練だったのですよ」と声をかけてくださる方に啞然とし、「もし自分が立派な牧師になるために今息子が苦しんでいるのであれば、私は喜んで牧師をやめます」と答えたあの言葉との出会い。人は人が苦しい時に、すぐにその意味を決めてしまう、人の弱さや愚かしさを教えていただきました。その愚かさは私も持っている一人です。

このような体験を通して、私は苦しみを語れる場があったことを感謝し続けています。また、私たちの苦しみを通して、同じように苦しんだ経験を分かち合ってくださいる方がいました。一緒に助けを神に祈って欲しいと言われました。そして、子どもが生きられた感謝を述べる時に、子どもが与えられない苦しみを語ってくださいる方がいました。子どもと離ればなれになってしまった、という方もいました。もう会えないという思いを、語ってくださいる方がいました。私は自分の苦しみを語れることに感謝するということは、一方でまた他者の苦しみの言葉を、自分のこととして聴く出会いの始まりを意味していることを知りました。そして、私には救う力がない、ということをも痛感しました。苦しみを語れる人がいれば、語れない人もいることを思います。語ることが、また苦しいということもあるのです。そして、もろもろの苦しみを十把一絡げにして扱うこともできません。星野富弘さんの言葉に聴きます。「私はたまたまこんな大けがをしましたが、だからといって私だけが特に大変というわけではなく、人は皆それぞれ他人にはわからない痛みや悲しみを抱えています。大切なのは、それをどう受け止めていくかということではないでしょうか。」アメンと答えます。

本日、パウロはテサロニケの人々のことを、テモテから聴いて非常に喜んだとあります。(6) わたしたちがあなたがたに会いたいと望んでいるように、あなたがたも私たちにしきりに会いたがっている、と。再会の思いは、一方通行ではなく、双方向からのものであったのです。そして、7節「それで、兄弟たち、わたしたちは、あらゆる困難と苦難に直面しながらも、あなたがたの信仰によって励まされました。」とあります。困難と苦難の出来事をしっかりと語りながら、励まされたと語るのです。体では離れていても、心では共にいて、そして共に主イエスを信じ、主イエスに祈

っていた。互いを思い、結ばれていた。1人ではない、心強められたと大胆に語るのです。

この7節の言葉は、「あなたがたのゆえに」と言う言葉が「あなたがたの信仰によって」という言葉の前に本来置かれているのですが、新共同訳聖書ではそこが省かれています。つまり、あなたがたの信仰だけでなく、あなたがたの全て、全存在、信仰だけでなく、苦しみをも含めて、「私たちは励まされた」と読めるか所です。そして、この励まされた出来事を通して、私たちは主に結ばれて生きていけると言えるのです。

この時代のみならず、コロナの出来事のみならず、私たちには苦しみがあります。様々な苦しみがあります。知れば知る程に、何もできない自分に気づかされ、無力の中で茫然とするのです。生きる事をあきらめてしまう。関わりを、断念してしまうことがあるのです。

しかし、私たちは主イエスに結ばれ(8) 神の御前に立たされて(9) 私たち一人一人の苦しみを、主が共にいて担ってくださる、知っていてくださる、聞いてくださる、そして共に向き合ってください、その出来事の前で、神様から与えられる喜びを見出して歩みたいのです。私の長男の名前は、「喜々」と言います。これは危機、危険をくぐり抜けてきた感謝をいつも忘れないで欲しいと言う願いと、そして、神の喜びは私たちの喜び、というルカ 2:10 から与えられた名前です。テサロニケの人々が苦しみの中、なお自分を覚えていてくれたという喜びをパウロが語ったように、他者が自分を覚えてくれる、喜びの中を歩みたい。苦しみの意味を、共に問い、神に聴ける幸いがあることを、祈り合える。このような苦難のただ中で与えられる喜びを共に証しして歩みたいのです。

苦しみを考え、語り、祈ることができることは、「暗いキリスト教」の象徴なのではなく、私たちが苦しみの中でも、共に生きている、生かされているという福音(よきおとずれ)の象徴です。10節において、パウロは、再会への願いを改めて語り、また夜も昼も切に祈っています、と結びました。苦しみの解決に、私たちは何もできないのでしょうか。そうではなく、心合わせ、覚え、祈ることができるのです。世界中の苦しみを知れば知る程に、無力さを知りますが、でも今、顔を合わせて祈る友、隣人のために、生きることができるのです。

3・11 東日本大震災後に、被災地支援に私は全国の青年達と向かいました。そこで被災者の方々と共に痛みを分かち合っていた、私たちのコーディネーター、金子ちかよ牧師がいました。毎晩、被災地での出会いの言葉、苦しみの事柄や、希望の事柄を語りました。その中で、1人の女子青年が、言ったのです。私たちは、自分の家に帰ったら被災地を忘れてしまうと思う、でもそれでいいのだろうか。金子先生の答えはこうでした。「あなたがは皆忘れてしまうよ、無理よ。ここに住んでいないのだから。被災地の人たちの苦しみを同じように経験することはできない。ただ、帰った先で、苦しんでいる人に心から寄り添ってほしい。そこで出会った人のいのちが、被災地の人たちのいのちにつながっているから」というものでした。

私たちは苦しみを学び続けたいと思います。よく耳を傾けたい。思い巡らしたいのです。そして、私たちの生きる現場でのいのちの声、痛みや苦しみの声に耳を傾け、よく祈りたいのです。奇しくも、今日証しをしてくださった姉妹が、コロナ禍で、覚え合える出来事を分かち合ってくださいました。そのことで私たちは励まされました。他者の苦しみが、自分の苦しみとなる。自分の苦しみが、他者の苦しみとなる。それが主イエスが真ん中にいてくださる、祈りの連続の中で私の喜びがあなたの喜び、私の喜びがあなたの喜びという言葉になっていく、希望の出来事なのです。